

第2回『音声データによる鳥類のモニタリング ADAM(Acoustic Data for Avian Monitoring)

－ 夜の鳥をモニタリングする 』

世話人 石田健・松岡茂

話題提供：

早矢仕有子：シマフクロウの声で営巣地をみつける

高木 昌興：リュウキュウコノハズクの声の個体差と背景となる研究例

コメンテータ

松岡茂：録音を利用して夜に鳥をモニタリングする

その他：早朝録音会と、そこでの録音結果の聞きくらべ

趣旨：鳥類のモニタリングに音声情報を活用していく可能性、考え方と適切な技術の共有について、情報交換し、提案をしていくきっかけにすることを目的に、この集会を行う。研究者が鳥類の存在を確認する情報として、音声を最初の情報とする割合はそうとう高い。春に、北米のハシジロキツツキの再発見（実際は2004年）が話題になった。その最終確認は、録音装置による音声データが鍵になったようだ。鳥類の存在を記録する目的はさまざまであるが、生息密度が低く確認が困難な種の存在確認を、より手軽な装置によって補助できる可能性がある。環境指標としての鳥類群集記録の一部分をなすともいえる。ハシジロキツツキの場合には、近縁種のいくつかの大型キツツキ類と区別できる特徴が指摘されている。最終的には、人が直接探索する必要があるものの音声データの威力をみせつけた。今回話題とする夜に確認される鳥のように、目的によっては音声だけで最終確認することが可能で重要となる。鳥学会の目録記載では、カンムリカッコウに適用されている。

2回目は、二人の方に日本の北と南からフクロウ類の音声記録についてご紹介していただく。事例紹介や前回の話題なども参考にしつつ、鳥類集団の音声モニタリングについて検討してみたい。

また、今回は、オプションとして録音探鳥会を事前に開催する。録音を研究に活用している参加者に愛用の録音装置を持参していただき、同じ場所の同じ音源を同時に録音した結果を、集会で聞き比べてみようという趣向である。録音機材や音声データの保存、分析のためのシステムも、DAT（高音質・世界基準）、MD（手軽・ランダムアクセス）、Hi-MD（PCM、長時間）、ハードディスク（大容量）、IC（小型・軽量）など多様で、それぞれに特徴がある。マイクロフォンも、対価格比性能がたいへんよくなっている。昔のスーパーコンピューター並みの演算性能を持つパーソナルコンピューターや大画面のフラットパネルディスプレイを研究者1人で独占して使用することも今は可能であり、コーネル大学の音声分析ソフト Raven などを利用して、ソナグラムのような視角情報に変換して音声データを集計、分析することも、より大量・長時間の録音について容易になりつつある。自動音声識別装置も、今後の可能性がある。未整理の状態である、過去に蓄積された録音の活用も可能性、将来にわたって継続して広域の音声情報を蓄積し、集約し、活用していくための方向性についても、引き続き情報交換し可能性をさぐりたい。環境省のモニタリング1000などにおいても、今後、音声情報を有効活用できる可能性や必然性が高まっていくだろう。多くの時間を、参加者を含めた今後の情報交換の方向性についての議論に当てる予定である。